

出れない3 サンプル

「あつ、出るっ、産まれるっ」

「がんばれ……」

「あああああ！！！！」

痛い。痛い。けれどもう楽になれる。だからあと少し、と篠崎の首に回した腕に力を込めた。

今まではずっと正常位のように仰向けで産卵をしていた。けれどある日突然ベッドに『産卵・アクティブパース』と書かれた雑誌が出現したのだ。

そこには色々な体位での産卵が掲載されていて、今回は初めての体位——膝をついて座る篠崎に縋り付くような姿勢での産卵に挑んだのだ。

「頑張れ、諒……」

耳元で篠崎の声が聞こえる。背中を優しい手が撫でる。

「あああああ！！！！んんんっ！！」

おしっこを出すように下腹部に力を込める。するとメモリメモリと尿道を裂くようにして卵が進んだ。同時におちんちんが割れるような激痛に襲われる。

「あああああ！！！！だいたい！！」

「もう少しだ……頑張れ……」

「うあああああああああ！！！！」

篠崎の身体にぎゅううううう！！と抱きつき必死にいきむと最後は篠崎が搾り取るようにして卵を出してくれた。

「ああ……」

「お疲れ様……諒、ありがとう」

額へのキス。

「はい……」

もうぐったりだ。今回は一つだけだったけれど、慣れない体位のせいか卵の大きさのせいか、とても時間がかかったのだ。

「大丈夫か。ほら、横になろう」

篠崎が卵を脇に置き、身体を横たえさせてくれる。もう指一本動かしたくない。

「ありがとうございませ……」

「おちんちん、タンポンを入れるよ」

「はい……」

篠崎が疲れ果てたおちんちんをそっと掬い持つ。

タンポン。そう呼んでいるけれど実際には女性が使うタンポンとは少し異なる。

産卵時、卵によって尿道はしばらくの間完全に塞がれることになる。そしてその排尿感によっていきむのだ。つまり産卵をしている間は排尿することができない。そのため産卵を終えたと開ききった尿道からおしっこが全て漏れ出してくるのだ。これは普通の分娩で言うところの後産（胎盤が出てくる）のようなものだ。

最初こそ垂れ流しにしていたものの、それもちよつと、と安西が言ったことでこの『タンポン』が出現するようになったのだ。

これは直径長さ共に五センチ程。生理用品のタンポンと同じ要領で使うものだ。

「んっ……」

「痛いかな」

「大丈夫です……」

七センチ程の卵が出たばかりのそこは五センチ程度なら簡単に飲み込んでしまう。けれどまだ敏感なそこは刺激を拾ってしまふ。

「よし、入った。筒を抜くよ」

「はい……」

注射をするようにタンポンを尿道の奥に挿入される。このお世話は恥ずかしいのだけれど、だからこそ好きなお世話でもあった。

「よし。できた」

「ありがとうございます」

あとはもう力を抜いていればいい。勝手におしっこが排泄されて、それは全てタンポンが吸ってくれる。そして水分でふやけたその処理は篠崎がしてくれるのだ。

篠崎の腕の中で、ゆったりと身体を休めながらそのときを待つ。

「あ……」

「出たかな」

篠崎が身体を起こし、陰部を覗き込んだ。

「ああ、ちゃんと出ているよ」

出ている。つまり、真っ白だった綿が黄色く染まってきているということだろう。

「恥ずかしい……」

「まだ恥ずかしいのか」

「だって……」
もう何度目の産卵かは分からない。けれどいつまで経っても羞恥が消えることはなかった。

「可愛い」

そう言って篠崎は顔ではなく、排尿を続けるおちんちんにキスを落とした。

「あっ！」

「まだおちんちんにお疲れ様をしていなかったからな」

「やあ……」

確かにおちんちんはたくさん頑張ったけれど、そこは安西の身体の一部なのだ。安西にお疲れ様のキスをくれたのだからそれでもう十分なの。

「よく頑張ったな……おしっこも全部きちんと出すんだよ」

篠崎はおちんちんを撫でながら優しく言う。もちろんおちんちんに向かって。

「やあ……」

しばらくするとタンポン抜かれた。ずる、という感触が少し気持ち悪い。

「あぁ、まだもう少し溜まってたのか」

何だろう、と思っていると尿道を水が流れる感触があった。

「あ……うそ……」

タンポンでは吸い切れない量の尿が溜まっていたのだ。恥ずかしい。そんなにたくさんおしっこがあったなんて。

「大丈夫。今日はいつもより少し時間がかかったからだろう。おちんちんを綺麗にしに行こうか」

篠崎の言葉選びにムラツとする。

「おちんちん、お掃除？」

ダメなのに、声に甘さが含まれてしまう。

「うん？えっちな気分になってしまったかな」

そう言う篠崎の声も甘い。

「こういう風にお掃除されたい？お口でしようか」

「え……」

篠崎は嬉しそうに微笑んでくれた。おしっこの後なのに。産卵で分泌されたぬるの液体もあるのに、いいのだろうか。

「最近諒くんのおちんちんにはペニスを入れるばかりで可愛がってあげられていなかったからな。しゃぶられるの、好きだろう」

「好き……」

嬉しかった。

けれど――

「……これでは啜えられないな」

それは小さな声だったけれど、安西の耳にもしっかりと届いた。

「っ……」

「すまない、変な意味じゃないんだ。啜えてあげようと思っていたんだが」

篠崎の言いたいことは分かった。篠崎は嫌なことを言う人じゃないと分かっているから。

ただそこは、伸びきっているのだ。だから以前のような小さな子供のおちんちんではなくなっている。大きいのだ。それも円柱状に整っているわけではない。平べったく、ぶよぶよなのだ。だから口に入らないのだろう。

「うう……」

篠崎のフェラチオはとても気持ちがいい。安西のそれがとても小さかったから余計に、咥内で自由に弄ばれることができたのだ。けれどそれももう――と、そこで気付いた。もしかしたらもう、篠崎は尿道におちんちんを入れても気持ち良くないかもしれない。

だってそこは本当に伸びきっているのだ。産卵するようになる前、安西が普通サイズのオナホールに入れても気持ち良くなれなかったのと同じようなサイズ感になってしまっている可能性がある。焦る。篠崎は優しいから歪なそれを愛らしいと言ってくれるけれど、産卵の度に少しずつ伸びてしまっているから、本当はもう受精させたくないと思っているかもしれない。それは嫌だった。つらいけれど、また産みたい。受精させてほしい。篠崎との卵をもっとたくさん産みたい。

「……戻してっ！！」

何も考えずに叫んでいた。タブレットに向かって。

「諒！待て！！」

篠崎が叫ぶ。しかしおちんちんも陰囊も、一瞬で元の大きさ――子供サイズ――に戻っていた。

「諒……どうしてこんなことを」

篠崎が『信じられない』と言わんばかりの表情で問うてくる。

「だって……」

「そんなにフェラチオをしてほしかったのか」

「え……？」

「啜えられないと言ったからじゃないのか」

「ちがつ……」

そうか。確かに篠崎からしたらそのタイミングだったかもしれない。けれど安西の心の中は違った。そんなことじゃ

なかった。

「……おちんちん、おしっこの穴も伸びきっていたから、もう受精させてくれるときも篠崎が気持ち良くないかと思つて……」

だつて伸びきった中に入れても、おちんちんは気持ち良くなれない。

「それで戻したのか？なんてことを……」

「え……？」

「俺が一度でも伸びたおちんちんを嫌だと言ったか？気持ち良くないからと射精できないことがあったか？」

「あ……」

どちらも、一度だつてなかった。

「けどっ、それは篠崎が気を遣つて……」

「気遣いで射精ができるか？」

「……できない……」

「諒くんの尿道はとも気持ち良かったよ。本当だ。だから何度も受精しただろう」

「はい……」

確かに交尾の度に必ず受精した。そしてたかさんの愛で全てにおいて産卵まですることができた。

「諒がもう産卵したくないというのならそれは俺には何も言えない。けれど産卵の痛みに耐える諒は本当にセクシーだった」

「セクシー……？」

「ああ。俺との卵を産むために泣きながら必死に耐えてくれただろう。とてもセクシーで興奮した」

「こう……ふん……」

まさか。だつてそんな素振り一度もなかった。

「うそ……」

「嘘じゃない。諒が産卵で疲れているから隠していただけだ。本当は産卵の度にまたすぐ受精させたいと思っていた。産卵の最中に、卵のある尿道に突き入れたと思ったことだってある」

「ほんと……？」

そんな風に思つてくれていたなんて。

「ああ。本当だ」

「ごめんなさい、僕……」

産むのに必死で、篠崎のことなんて何も考えられていなかった。

「いいんだ。たくさん産んだし疲れただろう。しばらくゆっくりしよう」

「や……」

篠崎の本音を聞いて、そのまま休むなんてできなかった。

「僕、もう一度……」

「だが、またひどい痛みになるぞ」

その事実は一瞬安西を悩ませた。

産卵の経験をする度に尿道や内部の管も伸びた。だから初産のときよりは苦痛は少なく済むようになっていたのだ。けれどそれを戻してしまつた今、もう一度産卵するとなれば痛みはまた初産のそれに戻ることになる。

「……けど、やっぱり僕、篠崎の卵産みたいです」

「いいのか」

「……また痛くて暴れちゃうと思うけど、支えてくれますか」

「ああ。もちろんだ。嬉しいよ。たくさん産んでくれ」

「はい……」

それでも一先ずおちんちんはそのまま、ということになった。本当はすぐにでもまた卵を産みたくなくなってしまったのだけれど、間を空けた方がドキドキするだろうと篠崎が言つたのだ。それに、忘れた頃に痛みに耐える姿を見たいから、と。

『痛みに耐える姿に興奮するなんて』と思つたけれど、それでもやはり嬉しい。何度でも耐えてみせる、と思つた。

~~~~~

「母乳が出るようになる薬を出してくれ」

考えていた割にはストリートな言い方だな、と思つた。もつと何か恥ずかしくなるような条件付きの要求をするのかと思つていた。

【承知しました】

【薬の効果は寝るまでです】

そしてボンとベッドの上に薬が現れた。

「諒」

「はい」

手渡された薬。口に入ればそれで効く。口を開け、放り込んだ。

「いいこだ。何か変化は？」

「ないです」

何もなかった。ラムネだったのか？と思えるほど。

「触るよ」

「はい」

胸を突き出し、篠崎に捧げる。

「いいこ。……どうかな」

「感覚は変わりません」

篠崎が乳首を乳輪ごと抓んだけれど、違和感は覚えなかった。

「ふむ……少しマッサージしてみようか」

ピアスは外されたままだ。篠崎に背を預け、両方の乳首を一緒に揉んでもらう。

「あ、あんっ、あっ」

「えっちなママだ」

「やあんっ、だつてっ」

痛みを感じることもないし、違和感もない。いつも通り乳首を弄られているだけなのだ。

「きもちいいっ、あっ」

「諒は後ろから乳首を同時に弄られるのが好きだな」

「あんっ、だつてきもちいいっ」

「俺も後ろからはやりやすいよ。まあえっちな顔が見られないのが残念だが」

「やあんっ、見ちゃっ」

「……ああ、鏡があればいいのか」

篠崎は一人で納得し、話を進めてしまう。目を閉じて乳首への快感に夢中になっている間に、いつの間にか寝室の壁と天井全てが鏡になっていた。

「ええっ！あっ」

これでは体位に関係なく全てが見えてしまう。

「これはすごいな。どこで何をしてても諒くんのえっちな姿が見られる」

「やあ、やだああ！」

「でも乳首、気持ちいいんだろう」

「いいっ、いいけどおっ」

気持ちいい。本当は感じ入っている顔も、快感に膨れた乳首も見えてほしい。以前からあった、正面からだ乳首を弄つてもらいにくいというジレンマ。

だからこれなら確かに恥ずかしいところを見てもらうことはできるのだけれど、如何せん部屋が広いので鏡までが遠いのだ。乳首の赤らみまでは見てもらえないだろう。

「しのざきっ」

「ん？」

「見て、見てほしっ」

「どこを？」

「身体っ、全部っああっ！」

全身を見てほしい。弄ってほしいとオムツの中で涙を流すおちんちんも、射精を求めて丸くなったタマタマも、ペニスを待ち望むアナルも。全てを見てほしい。

「えっちなママだ。ああ、ほら、出てきたよ」

「え？ あっ！」

くりゆくりゆと揉まれ続けていた乳首から指が離れた。俯いて解放されたそこを見ると、うっすらと濡れていた。

「あ……おっぱい……？」

「ああ。諒くんの母乳だよ」

「あ……うれし……」

けれどまだ滲む程度にしか出ていない。これでは搾乳はまだできないだろう。

「やはり乳首の大きさの関係かもしれないな。おっぱいも揉んで、乳腺を発達させようか」

「……僕のおっぱい、宜しく願います」

最初に篠崎がしたのは、タブレットに薬の効果を延長するように言うことだった。終わりと告げるまで、寝ても効果を切らさないでほしいと。

【承知しました】

それから乳首の写真をアップで撮られた。いつのまにカメラを用意したのだろう。

「篠崎……？」

「記録をつけようと思って」

「記録？」

「ああ。乳輪の大きさ、色、乳頭の長さ、太さ。全て記録を取って残しておきたい」

「そんな……」

「いやか？」

篠崎はわざと訊く。そんな恥ずかしいことを嫌だと思わなければならないのに。分かっているが訊いて、安西の言葉を引き出そうとするのだ。そういう意地悪なところも好き。

「……乳首、たくさん撮ってください」  
「うん。ああそうだ、胸囲も測っておこうか」

タブレットはもしかしたら、もう全て分かっているのかもしれない。タブレットに向かって頼んだわけでもないのに、ベッドの上にはメジャーやノギスが出現した。それから、アルバムも。

急な出現に疑問を持つことなく、篠崎はメジャーを伸ばした。そして伸ばした部分を手で握っている。

「篠崎？」

「ああ、冷たいのを乳首に当てられるのは嫌だろう？」

なんという気遣いか。確かに普段から気の回るタイプだけれど、まさかそこまで気を回してくれるなんて。

「……冷たくてもいいです。だから、早く……」

そこまで大切にしてくれる篠崎に早く触れて欲しかった。そして至近距離でえっちな乳首を見てほしい。

「待てないのか」

「待てない……早く……」

メジャー、ノギスを使って全てのサイズの計測をされた。特にノギスに乳頭を挟まれたときは冷たさにびくりとしたのに、羞恥による興奮のせいで乳頭が柔らかくなることはなく、計測を終えても尚、勃起を維持していた。

「いいこだ。本当に可愛い乳首だ。もっといやらしくなろうな」

「……どのくらい」

どのくらいまで伸ばすのだろうか。女性に興味もなかったから、女性の乳首の方が大きいことは漠然と分かっている、具体的な大ききまでは浮かばなかった。

「そうだな……せつかくだから乳頭はリボンを結べるくらい長くしたい」

「え……そんな……」

リボンを結ぶなんて。糸なら分かるけれど、リボンを結ぼうと思ったら一センチでは足りないだろう。

「嫌か？乳頭を垂らしている歩くところが見たいな」

「……篠崎の好きな見た目になりたいです……」  
だってこの身体は篠崎のものだから。

それから一日のスケジュールが決まった。

起床後、オムツにおしっこをし、替えてもらう。それからミルクを飲ませてもらって、たくさんのキスをもらう。そして、ピアスを抜かれて乳首弄りの時間。

ソファで後ろから抱っこされて乳首を弄ってもらうのだ。両方の乳首を同時に。そしてそのとき、安西は邪魔にならないように気を付けながら鏡を持つ。乳首の様子を篠崎に見てもらえるように。

「勃起したらきちんと言いなさい」

「はい……乳首、しっかりと勃起させてください」

あくまでサイズ計測のためだ。だから乳首が勃起すれば気持ちいい時間は終わってしまう。でも少しでも長く快感を得たくて、どうしても勃起しましたと言えずに快感を貪ってしまう。

「ああっ、あんっ、あっ！」

「諒、まだ勃起しないのか？」

「まだあっ」

本当はもう乳首もおちんちんも限界まで勃起している。でもまだもっと乳首を弄っていてほしい。できればおちんちんも弄ってほしい。

「諒。嘘はいけないよ。嘘を吐いた悪い子にはお仕置きだ」

「っ、ごめっ、ごめんなさいっ」

「だめだ。諒は嘘を吐いただろう？」

「はい……」

「どんな嘘を吐いた？」

「乳首、勃起してるのに勃起してないって言いました」

だって篠崎だって鏡越しに見ているし、それに手の感触で分かるところだ。それで勃起と判断されないのだから、まだいいかなって――。けれどそんな言い訳、篠崎に対しては言えなかった。

「お仕置きだ。身体をこちらに向けなさい」

一度ソファから降り、篠崎の方を向いて足の上に座る。

「乳首に踵をつけるよ」

「はい……」

乳首のピアスは乳頭の真ん中を通っている。先端の方だと重みで千切れてしまうかもしれないけれど、中間ならその心配もない。もし穴が根元だったら、きっと乳頭を伸ばすことはできなかっただろう。――もしかして篠崎はここまで考えて穴を開けたのだろうか。

「考え事か？」

「いっ、いえ……」

「また嘘を吐いたな」

ああ、もう。どうしてすぐにバレてしまうのだろう。

篠崎は無言で乳首にリングピアスを入れた。それだけでは特に重みも感じない。けれどそこにチェーンの付いた踵をつけられた。

「ああっ!!」  
重い。かなり重い。  
「痛いカ」  
「痛いっ、千切れるっ!」  
「千切れないよ。これくらいなら大丈夫だ」  
両方の乳首に付けられた錘。チェーンのせいで、身体の動きに合わせて錘が揺れる。  
「部屋を一周しなさい」  
「はい……」  
「ああ、四つん這いでだ」

~~~~~

安西は疲れ果て、ベッドで死んだように眠っている。
「どうして俺のDVDがない」
「ここでお二人に別れられては連れてきた意味がなくなります」
つまり、篠崎のオナニーDVDを安西が目にすることによって二人が別つ可能性があったということだ。
「もういいだろう。俺のDVDを出せ」
【承知致しました】
「それから、諒の身体を戻してくれ」
【承知しました】

※ ※ ※

「んう……」
「諒くんおはよう」
「んん……しのざき……」
腕を伸ばすと抱きしめてくれる優しい腕。身体にかかる重みは幸せの重みだ。
「しのざき……」
「ん？おしっこかな」
「ん、おしっこ……おちんちんのところ触ってください」
「うん、ほら」
篠崎の手のひらがオムツ越しにおちんちんを撫でる。気持ちいい。でも性感ではなくて、おしっこをしてもいいよという許しの快感。だって幼少期ならまだしも、おしっこの許可なんてもらえるものではない。
「あんっ……」
「おしっこをするだけでそんなに可愛い声が出してしまうのか」
「だって……」
背徳感が癖になる。いけないことをしている。それが気持ちいい。
「あ……出るっ……」
しよろしよるとおしっこが流れ出す。けれどそれはすぐにオムツに消えた。
「いいこだ。ちゃんと出せたな。さあ、オムツを替えてミルクにしよう」
「ん……あの、篠崎」
もう排尿は終わったというのに、篠崎はずっとおちんちんを撫でている。気持ち良くなってしまう。興奮が高まっていく。
「しのざき、乳首は？」
「……それならもう終わりだ」
「え？」
「戻したよ」
「え?!」
急いで身体を起こし胸を見る。そこは確かに以前と全く変わらない小さな乳首に戻っていた。
「なんで……?」
あんなにつらい思いをして、たくさんの時間をかけて肥大させてもらったのに。
「諒が可愛くて。また今度、最初から大きくし直したいんだ」
「……わかりました」
それならいい。そう思ってくれるのなら。だっておちんちんの皮を伸ばして篠崎のペニスを入れられるようにしてもらったときも、産卵で尿道を拡張したことも、結局また一からになったのだ。乳首だってまた一から伸ばしてもらえばいい。また一から、たくさん弄ってもらえばいい。
ねだれば篠崎は絶対に嫌とは言わずにしてくれると知っているから。
気持ちを切り替える。
「しのざき、今日、どんなえつちをしますか」

朝イチでこんなことを聞くのははしたないと分かっているけれど、我慢ができなかった。

「……今日は少し他のことをしたいんだ」

「他のこと？」

篠崎の手がオムツから離れ、おちんちんが寂しくなる。けれどそれよりも篠崎の様子がいつもと違うことが気になった。

「なんですか？」

まだ替えられていないオムツ。身をよじると温かい面が陰囊に触れて気持ち悪いけれど、気にしてなんていられない。

「篠崎？」

「……いや……まずはオムツを替えようか」

「……はい。けど、ミルクはいいです」

わかった、と篠崎は短く言った。

オムツ替えを終えて、プレイルームに入った。手を引かれて着いた先は最奥のDVDが並ぶ棚。

「これ……」

最後にここに来たときよりも、DVDの数が増えていた。

「俺がオナニーで想像した内容のDVDだよ」

「え？だって……」

「見てごらん」

篠崎が徐に取り出したジャケットを見る。

「これ……」

信じられず、裏面を見た。けれど裏面も同じだった。急いで他のDVDを棚から取り出す。そして見る。それを何度も繰り返したけれど、どの写真の安西も同じような姿をしていた。

「僕……」

「ああ。これを見たら、君と俺が別れると懸念して出さなかったらしい」

「なんで、今……？」

「俺が出すように頼んだ。それにタブレットも了承した」

それは、今の安西なら受け入れるだろうと二人——篠崎と部屋の主が考えたということだ。

「別れたくなかったか」

「まさか。……あの、観てみたいです」

「リビングに行こう」

歩きながら、手にしたDVDを盗み見る。

何度見直しても、そこに写る安西には手足がなかった。

『諒くん、ほら、ご飯の時間だよ』

『ん……』

自らの口内で咀嚼したものを口移しで食べさせる。諒は文句も言わずに次々と飲み込んでいく。

『美味しいか』

『美味しい……』

諒に手足はない。四肢は手術によって根元から切り落とされ、自分では寝返りを打つことすらできない。四肢がないだけで他は普通の人間と何も変わらない。だから話すことも、囁むことも、飲み込むこともできる。けれどそれはさえない。全てが欲しくてこの身体にさせたのだから。

『次は何がいいかな』

『ん、にんじん』

煮込まれ柔らかくなった人参を口に含む。そして小さくなった人参と唾液が混ざり、どろどろになるまで咀嚼する。

『ん、早く』

きつと空腹なのだろう。一見すると運動ができないせいでエネルギーを使うことがほとんどないように見えるが、毎日飲んでいいる造精剤によって日に何度も射精する身体からはすぐにエネルギーが枯渇してしまう。

『ん……』

口に人参を流し込むと、すぐにコクンと喉が鳴る。それがとても可愛らしい。

『……しのざき、もうおちんちんが我慢できません』

『今朝出したばかりだろう』

そう言うとき諒は顔を赤らめる。出しても出しても性欲が湧き上がるのは篠崎によって直腸に薬を塗り込まれているからだというのに。自分では拒否のしようもない薬のせいだというのに、諒は恥ずかしいと感じているのだ。それがどうにも可愛い。

『おちんちんを見ようか』

排泄のコントロールができないのは、四肢をなくしたからではない。徹底的に管理をして排泄の感覚を失わせたからだ。

『ン……恥ずかしい……』

もうこの姿になって半年も経つというのに、諒は身体を見られる羞恥心を失わない。入浴も排泄も全てを篠崎によって行われているというのに。

『ああ、本当だ。勃起してしまっているな。苦しそうだ』

『はい……おちんちん苦しいです。射精させてください』

いつもなら、勃起次第ベニスを弄って射精を促してやるのだけれど、このまま我慢をさせてみたい、とふと思った。

『少し、我慢してみようか』

『やっ、なんでっ؟! やです、やだ』

『だが朝の射精からまだ三時間しか経っていないよ。おちんちんがひりひりするの嫌だろう』

『あ……』

きつと先週のつらい記憶が甦ったのだろう。諒が黙り込む。

先週——そのときも少し虐めたいなと思ったのだ。素直な諒が可愛くて可愛くて、もっと泣かせたいと思った。なので諒には内緒で媚薬を含ませたのだ。効果はてきめんで、何度射精しようとも数時間勃起が収まることはなかった。

そのときの諒の様子を思い出す。たくさん涙を溢しながら、ベニスへの刺激を望んだ。もちろん篠崎は望まれるがままだにベニスを刺激した。扱いてほしいと言われれば扱き、亀頭を撫でてほしいと言われればもうやめてと言われるまで何十分でも撫で続けた。

もう出ないから吸い出してほしいと言われたときは諒が泣き叫ぶ程の強さで吸った——もちろんそのときにはもう何も出なくなっていたが諒はイった。

そして薬の効果が切れて失神するように眠ったのだが、起きた途端に『おちんちんが痛い』とぼろぼろ泣いたのだ。何時間も刺激され続けたベニスは時間を経て真っ赤に腫れ上がり、小さかったそれは一回り大きくなってしまっていた。

『ああ、可哀想に。けれど病院に行くことはできないから、しばらくおちんちんは触らずに大事にしような』

そう優しく言えば諒は泣きながら何度も頷いた。そしてまた、諒には気付かれぬように媚薬を含ませたのだ。その後の諒の発狂ぶりは、見ているだけで篠崎に暴発を促したものだ。

そのときの記憶を今、諒はしっかりと思い出している。怖いのだろうか。小さく震えている。

『どうする? おちんちん、前みたいに痛くなってしまいかもしれないけれど、ごしごししようか』

『やっ! やです、おちんちん我慢します……』

諒にはもう一生することのできない自慰。射精するためには篠崎の手が必要だった。そのことがひどく劣情を煽る。自分がないと生きられない。四肢がない、その姿を見るだけで、諒が寝ていようとそれだけで何度でも射精できそうだった。

~~~~~

篠崎がタブレットに告げた。

「蚊を」

か、とは一体何だろう。かを……かおだろうか。顔? 分からない。身体を起こせないのでタブレットが何と返事をしたのかを確認できない。でも、知らなくていい。

それにしてもいつの間に篠崎はタブレットとこんな風にやりとりをするようになったのだろう。今まではオナニーに使われた——想像の中も含む——ものは全てプレイルームに用意されていた。そしてそれを手を繋いで取りに行っていたのだけれど、今篠崎はタブレットに話しかけることでこの場に用意してもらっている。

ずるい。だって自分がオナニーで使ったいやらしい道具を取りに行くのは本当に恥ずかしかったのだ。それも一人で行くのではなく、篠崎と一緒に行かなければならなかったから余計に。なのに篠崎はこうして簡単に用意を済ませている。

「諒」

「あ、はい」

「考え事か」

「すみません……その、顔って何ですか?」

「顔?」

「今タブレットに言ってみましたよね」

「ああ、顔じゃないよ。蚊だ。虫の」

「え……?」

篠崎がビニール袋を掲げて見せた。よくスーパールとかにあるようなサイズの透明なビニール袋だった。けれど中には無数の黒いものが——蚊が入れられていた。

「や、篠崎……それ……」

「うん、諒くんのおちんちんをここに入れるよ」

「ひっ」

何てことを。おちんちんを蚊がたくさん入った袋に入れるなんて。

「大丈夫……痒いけれど、痛くはない」

「や、やだっ、しのぎきつ!」

やめて、お願いと首を振りながら懇願する。けれど篠崎は止めるどころか袋をおちんちに近付けた。

「医療用テープで留めるよ。剥がすときは少し痛いかもしれないけれど、毛もないしそれほど苦痛は感じない」



テープの痛みなんてどうでもいい！そう叫びたかった。だって、このままではおちんちんが蚊に刺されてしまう。

「いやっ！嫌です、やだっ、篠崎っ！」

「諒。お話できないようにしようか？」

「っ……」

四肢のない今の安西にとって言葉というのは生命線だった。これをなくしたらもうどうなってしまうことか。

「いいこだ。さあ、蚊にご飯をあげような」

いや、やめて、お願い——心の中で必死に懇願するけれど、篠崎は無情にもおちんちんに袋を被せ、根元をテープで留めてしまった。

「ひいひいっ！！」

おちんちんがくすぐったい。蚊がとまったのだ。

「ああ、諒くんのおちんちんの血は美味しいのかな。さっそく蚊が吸血を始めたよ」

「やああ！」

~~~~~

「諒、これは諒の前立腺だよ」

聞こえていないと分かりつつ、声をかける。

「愛してる。諒は本当にどこも全てが可愛い」

本来ならグロテスクと感じるはずの臓器。その臓器——前立腺を切り出したときも可愛いというのが感想だった。

さっきのセックスで挿入したときに前立腺を切るよう石を握ってイメージした。それをお湯に浸けておいたのだ。だから挿入後、諒は前立腺で快感を得ることができなかった。完全に物としての存在になったのだ。それでもアナルは健気にペニスを締め付けた。精が欲しいと嬖が射精を促した。

「最高だった。本当に諒は最高だ」

その健気さには感動さえ覚えた。そして今も諒は恐怖と闘いながら全てを委ねてくれている。

「……諒」

諒の腹の上に転がる前立腺を拾い上げる。小さなボールのようなものだ。触れただけで諒の身体は跳ね上がり、断末魔のような悲鳴が上がった。

「いやああああああ！！！」

その悲鳴すら愛らしい。指やペニスで前立腺を軽く突かれるだけでひどい快感を得ているのに、それに直接触れられれば気を失ってもおかしくないだろう。けれど諒は耐えていた。

「諒……」

今、何がどうなっているのか諒は全く分からないだろう。このまま犯したい気持ちもあるけれど、可哀想という気持ちもあった。

抓んだ前立腺をそっと諒の頬に押し当てる。また身体が大きく跳ねた。ツン、ツンと触れさせては離し、触れさせては離し、と繰り返す。これできつと諒は前立腺への刺激と頬に当たるタイミングが同じだと分かっただろう。

一度前立腺を頬から離し、前立腺から水滴の移った頬を舐める。柔らかな頬だ。まるで赤ん坊のような肌。そのまま舐めしやぶりたい気持ちを抑え、今度は顎を持って横を向かせ、上を向いた頬に前立腺を乗せた。

「ああああああああ！」

微かな刺激でもつらいのだろう。閉じられたままの目からは涙が零れた。もったいない。諒から漏れる体液は何でも飲み干したいのに。

それでも今は先にやるべきことがあった。きつと涙はこの後止まることなく流れ続けるだろう。吸い取るのはそのときでいい。

「諒……がんばれ……」

自分だったらきつと殺してくれと懇願するだろうな、と思う。けれど全てを受け入れようとしてくれている諒をもっともと愛したい。自分なりのやり方で。

頬に置いた前立腺を、吸い取るようにして口に含んだ。

「ああああああああ！！！！！！！！」

顎が勢いよく上がり、胸を仰け反らせ、そのままぱたりと落ちた。

下腹部を見ると、尿が垂れ流されていた。

(可愛い)

失神・失禁。けれど気を失ったままでは寂しい。

口の中の前立腺をそっと舌で転がす。

約5万6千文字です。